



人を育てる

●
木村 孟 Tsutomu KIMURA

大学改革支援・学位授与機構 顧問, 東京工業大学 元学長



最近、我が国における人材の劣化が甚だしいという声をよく耳にする。確かにそのような見方も一理あるようにも思えるが、何しろ歳を重ね過ぎた我が身である。早計な判断は、なるべく控えるようにしている。

もう数十年前のことになるが、東京大学の教養学部長を務められ、サマセット・モームの研究者として知られている朱牟田夏雄^{しゅむたなつお}先生が、旧制第一高等学校時代の思い出を書いておられたエッセイを目にしたことがある。先生の入学直後に催された新入生歓迎会でのことである。会には、多くの^{そうそう}錚々たる先輩が席を連れ、次々と歓迎の挨拶が述べられた。そのほとんど全員が、「最近の一高生はたるんでおる。誠に嘆かわしい。一高の将来が心配である」というものであり、新入生一同身の縮む思いであったと言う。これらの先輩に続いて立ったのは、一段と若い白面の美青年で、「先輩はいろいろ言われたが、自分はそうは思わない。今の一高生も自分たちのころと変わっていない。もし先輩たちが言うとおりであったなら、日本はとっくの昔に滅びている。先輩の言うことを気にする必要はない」という挨拶をした。出席した新入生大いに感激したそうである。この人物は、当時新進の作家として注目され始めていた芥川龍之介である。

筆者が在籍した東京工業大学で、かつて「一日化学教室」を催したことがある。筆者が学生部長を務めていた30年弱前のことで、化学会の啓発運動の一環であったと記憶している。間違っているかもしれない。電車の吊り広告等で広報を行い、応募してきた学生の中から100人ほどを選んだ。倍率はかなり低かったように思う。この学生のために、20ほどのテーマを準備し、5、6人ずつのグループに分け、実験をやって貰おうという企画である。企画書を詳細に見たが、テーマはどれも非常に面白く、よく練られた企画であるとの強い印象を得た。参加した高校生に会う機会はなかったが、当日、担当の先生方が生き活きとして飛び回っていた姿は今でも目に焼き付いている。

後日、参加者の感想文を詳細に読む機会があったが、驚くほどの反応で、ほとんど全員が、将来は化学者になりたいとか、化学関係の仕事をしたい等という希望を述べており、こちらが圧倒されるほどであった。また、我々はむしろ汚いとか思っていない本館の建物を、「歴史の重みを感じられて素晴らしい。あんな環境で研究している人たちが羨ましい。自分もそんな人になりたい」という高校生も何人かいて、やや複雑な気持ちにさせられた。

それから半年ほど経った3月の末、企画全体の責任者であった教授が部屋へ飛び込んできた。「凄い。凄いですよ」と言って、発表したばかりの入試合格者のリストを広げた。リストには、確か3人ほどであったと思うが、名前にマーキングが施されていた。何と、「一日化学教室」参加者の内から合格者が複数出たのである。調べてみると、これまでほとんど合格者を出していない高等学校の卒業生であった。

「近ごろの若いものは……」という年寄りの口癖は、2000年以上も前からあったと言われている。大切なことは、多少知恵を持っている年寄りが、若い人たちを批判するのではなく、励ましつつ、その知恵を若者に伝える努力することであると思う。それが、今後を担う人材を育てる第一歩ではないかと考えるが如何なものであろう。 © 2016 The Chemical Society of Japan